

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 増記隆介

本論文は平安から鎌倉初期、いわゆる院政期に制作された仏画を対象とし、中国の唐から宋にかけての仏教美術と比較しつつ、その図像や様式の影響関係を考察する。かつて、院政期の仏画がもつ精緻で耽美的な表現は、いわゆる国風文化の成熟によって達成された日本固有の美意識の極点とみなされていた。近年、中国美術史や、東アジア海域交流の研究が進展するにつれ、こうした見方は修正され、同地域における仏教美術の親近性が強調される傾向にある。

五部構成のうち、第一部は、正倉院をはじめとする唐代美術の蓄積が平安時代の美意識の基盤をなし、その上に宋代美術の様式や技法をいかに選択し受容したか、という論文全体を貫く大きな構図を提示する。藤原道長や後白河上皇の美術コレクションに国際的視座を与えるものとして注目される。第二部から四部では、平安密教における「孔雀明王」、法華経に基づく「普賢菩薩」、それぞれの図像請来の実態について日中を往来した僧の分析や現存作例の比較を通じて解明を試みる。また、「普賢十羅刹女」に和装が導入される過程を探ることで、平安から鎌倉時代にかけての仏画の和様化という問題に考察を広げる。さらに、第二部から五部にかけては中国・杭州に着目、この地を首都とした呉越国の仏教美術と、つづく北宋・南宋期における仏画の地方様式を追究し、国内に現存する関連作品の位置づけを再検討する。

以上の考察の基盤をなす、作品の現状に対する精細な観察と明快な記述、史料の厳密な解釈は、美術史研究の範とするに足る。一方で、唐宋や院政期の時代区分、比較作例の年代設定、山水画と仏画の様式比較、図像の選択に関わる僧侶の役割については、曖昧さを残した部分も見受けられる。しかしながら、幅広い時代と地域にわたる図像・様式の接点を具体的に指摘し、これら複数の点を結ぶことで、院政期仏画のもつ国際性を面的な広がりとして提示したスケールの大きさは、従来の仏画研究とは一線を画するものである。さらに、国内に現存する日中双方の主要な仏画作例を網羅し、修理等で得られた制作技法に関する新知見を数多く含むこと、日中の史料と最新の研究成果を博搜し、聖俗の権力による個々の絵画制作の契機についていくつもの新見解を述べている点も重要である。本論文によって、東アジアの仏教美術を議論する共通の基盤が整えられた意義はきわめて大きく、審査委員会は、博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断した。